

【ポスター発表】

予防的退院支援策の必要性

ーソーシャルワーク方法論の予防的活用に向けてー

○日本社会事業大学専門職大学院 木戸 宜子 (3228)

キーワード：世代移行期、情動反応、予防的支援

1. 研究目的

世界情勢変化の影響は、日々のソーシャルワーク実践にも及んでいる。目前の問題に対処するだけでは問題解決には至らない。あらかじめ問題発生や事態悪化を予測し、その兆候が見られた時点からの対応が必要になる。また急変する情勢や急速な状況悪化にも、即座に対応できなくてはならない。加えて、実践活動の成果をあげるには、実践者の持つスキルに依拠するだけでなく、同時に立体的機能的な支援システムを稼働させなければならない。実践の指針となるソーシャルワーク方法論の活用も転換の時期に来ている。

現在、家族に特定の事象が発生した場合に、家族支援は事後対応や生活不安への対処、福祉サービス適用のための策だけでは不十分である。予防的ないしは事前の対応策についての支援計画や支援プログラムの設計が必要となってきた。特に、世代移行期の家族がもつ不安や葛藤は、病院ソーシャルワークの退院支援場面においてよく浮上する課題である。本発表では、障害をもつ成人の子を含む世代移行期にある家族支援のあり方を検討する。

2. 研究の視点および方法

世代移行期の家族の課題についてボーエンの家族評価理論を適用し、想定される予防的支援策についてマイクロ・メゾ・マクロレベルから整理し、支援計画案を作成し、その妥当性について考察する。ボーエンの家族評価理論では、家族の尊厳保持の視点で情動システムを捉える。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理規程、ならびに日本社会福祉学会研究倫理規程にもとづく研究ガイドラインに基づいて行った。支援例の提示にあたっては、個人情報を含む実際の事例は用いていない。

4. 研究結果

医療機関での退院支援の例を取り上げる。年老いた両親と成人の子からなる家族が、患者(成人の子)の入院中はとてもよく適応していたが、退院方針が提示されると退院を拒否し、入院の継続を訴え、高いストレス状況に陥った。

この家族の状況変化について、情動反応の概念を適用して考える。子の退院についての両親の対処法として、情動反応の3つのパターンが考えられる。①両親が不安定になる、②両親は安定し

ていて退院に備える、③両親は退院については考えないことで安定している。

コーピングの観点からは、この家族が、①子の入院に対する両親の高い適応力、②退院に対する高いストレス、③状況変化に伴う不安への家族独自の対処法 があると考えられる。

これらの考察に基づき、4段階の支援計画案を設計する。

- (1) 家族支援開始時のオリエンテーションの実施(メゾ) : 生活様式の変更時には、家族が話し合う機会を設けることを伝える。特に、両親が子の入院により不安定であれば、また退院の拒否があれば、家族全員のコミュニケーションの機会が必要である。
- (2) 家族の離別に関する家族の独自の不安との取り組み方法について具体例を尋ねる(これは、生活歴の情報として聞き取る)(マイクロ～メゾ) : これまで家族がどのように暮らしてきたか、子の世話にあたってきたか、不安への対処の仕方など。
- (3) エンパワメントの技術の活用(マイクロ～メゾ) : 家族が取り組んできたこと、その中で培ってきた強みを確認する。入院や施設入所など、家族の生活様式が変更されても、家族の一体性と個性のバランスが保持され、持続されることに焦点をあてる。
- (4) 家族の環境との相互作用の促進(メゾ～マクロ) : 両親や成人の子に対する福祉サービスの利用を提案する。

以上、情動システムの観点から家族に起こる情動反応やコーピングなどを理論的に予測し、家族の尊厳保持を目的にマイクロ・メゾ・マクロレベルから関わる予防的支援策を想定した。

5. 考察

世代移行の時期に家族は、役割変更や葛藤、不安などと取り組むことになる。子世代に病気や障害があり、より複雑になる世代移行での情動反応には配慮が必要である。これは、障害者福祉支援においては親亡き後の課題とされてきた。また病院の退院支援においては身元引受の問題とも重なり、子の入院を機に親が責任を放棄することもみられる。

ボーエンの家族評価理論では、世代移行期にも家族は独自の取り組みをし、家族の各構成員の言動は家族システムの動きから決まってくる。家族の適応性評価の視点によって家族の持つ強みを把握し、家族の一体性と個性のバランスを保持する支援計画案は、家族の世代移行期に介入し、中長期的な家族支援計画策を備える予防的支援となる。ソーシャルワーク方法論活用の方向性として、起こっている問題状況への解決対応から、予防的支援計画策定ならびに支援システムの機能的稼働にまで目を向けていく必要がある。今後の課題は支援実践プロセスの評価を経て、予防的支援計画の妥当性を検討することである。

[文献] マイケル・E・カー／マレー・ボーエン著、藤縄昭／福山和女監訳『家族評価－ボーエンによる家族探究の旅－』（金剛出版、2001年）

本発表は、科学研究費助成事業 基盤研究(C)「地域を基盤としたソーシャルワークの予防・予測的機能を発揮する実践理論モデル開発」（課題番号 18K02078）の研究の一部です。